

橋本俊詔『格差社会』

第4章 格差社会のゆくえを考える

1～5: 要点のまとめ

1 格差拡大を容認しても大丈夫なのか

- 小泉首相「格差の何が悪い」
 - 経済効率が重要であり、そのために不平等が増えてもやむをえない
- 経済効率のためには格差拡大はやむをえないのか？ — 「トレードオフ」と「収穫逦減の法則」
 - 「トレードオフ」の考え方：経済効率を高めるためには貧富の格差拡大はやむをえない
 - 「収穫逦減の法則」の考え方：ある要素を2倍、3倍、4倍にしたとき、それに比例して期待される効果が増すわけではなく、効果は逦減する

- 有能な人に高い報酬を与えることを例に
 - 「トレードオフ」の考え方: 高い報酬を得ても高額な税を課せられれば、有能な人のやる気をそぐ → 経済効率が低下し社会が活性化されない
 - では報酬を2倍、あるいは5倍にしたら、経済効率あるいは努力の程度もそれに比例して高まるか？
 - 「収穫逦減の法則」の考え方: 有能な人に高い報酬を与えたとしても、経済効率への効果にはある程度の限界があるだろう
- 公平性を犠牲にすることが、必ずしも効率性を高めるとは言えない
 - 公平性と効率性は両立が可能(第5章1で詳しく述べる)

2 貧困者の増大がもたらす矛盾

- 貧困者の増大は社会にとってもマイナス
 - － 低賃金労働者が増える → 労働意欲を失う人が増える → 日本経済活性化にとってマイナス要因
 - － 貧困者が失業者の場合 ー 人的資源のロス
 - － 貧困者・弱者の疎外感・劣等感 → 勝者・高所得者への憎しみ・嫉妬 → 犯罪、社会の不安定化
 - － 貧困者に対する公的援助の必要 → 社会的負担の増加
 - － 倫理的問題
 - 富豪と貧困者が併存する状態が人間的と言えるか？
 - 強者が弱者を見下すような社会が望ましい社会か？

- どの社会にも格差は存在する
 - だがそれが行き過ぎたとき、はたして人間的と言えるか？
- アメリカ社会における犯罪と災害のリスク
 - 70年代後半から80年代に犯罪率が激増 — その背景には貧富の格差増大が
 - 2005年8月ハリケーン「カトリーナ」: 富裕層は郊外に避難できたが、貧困層に多数の死者
- アメリカ社会における健康格差の問題
 - 貧困者: 粗末な食生活、満足な医療も受けられず早死に
 - 金持ち: 健康な食生活、高度な医療を受け長生き
 - アメリカには、非常に貧しい人や高齢者を除き、一般の人に適用される医療保険制度は存在しない
 - 日本でも、一部の貧しい人が国民健康保険料が払えず、病院に行けない、という問題が起こっている

3 ニート、フリーターのゆくえ

- ニート
 - 1993年40万人台 → 2002年60万人を超える
 - 2000年代に入り、30歳前後のニートが増加
ニートのうち50%以上が25～34歳
- フリーター
 - 1982年50万人台 → 2000年代に入って200万人を超える
 - 内閣府の調査 – 2002年 417万人
 - フリーターの多くは正社員を希望している
 - 一度フリーターになってしまうと、フルタイムにはなかなか入れない – 企業は勤労意欲も仕事の熟練度も低いと見ているので雇うメリットを感じない
 - 学歴の低い人がフリーターになる可能性が高い

- フリーターを続けた場合の生涯賃金

- パート労働を続けた人： 4637万円
- 常用の非正規労働を続けた人： 1億 426万円
- 正社員として仕事を続けた人： 2億 791万円

- フリーターとニートの将来

- フリーター

- 平均年収140万円 – 最低限ぎりぎりの生活ができる程度の収入
- 家族・子どもを持つことは難しい

- ニート

- 働いていないので所得がない – 親に頼る生活
- 親が病気になったり死んだりすれば、貧困層に

- フリーターもニートも、対策を行わなければ、将来深刻な事態を招く

4 階層の固定化と人的資源の危機

- 格差が拡大すると階層の固定化が起こる
 - － 格差が拡大を続け、不平等化が進行すると、階層の固定化に向かう恐れがある
- 階層の固定化の例：政治家とプロ野球選手
 - － プロ野球選手の場合：最初の段階では親の地位が有利に働いたとしても、その後は本人の努力次第 → 選手としての能力は目に見える形であられる → 能力がなければ淘汰される
 - － 政治家の場合：わかりやすい形でその能力を判断することは難しい → 淘汰されにくい

- 階層固定化の問題点

- その地位、職業に適していない人が、親の力を背景にその地位、職業に就く → それにふさわしい人の機会が奪われる
- 競争の活性化につながらないだけでなく、社会にとってマイナス

- 階層社会をどう考えるか — 国家の将来像にかかわる大問題

- 日本社会は階層固定化に向かいつつある
- このまま格差拡大 = 階層固定化に誘導するか、あるいは格差是正 = 階層固定化緩和へと向かうか
- 橋木自身の意見: 「階層が固定化し、本人の意思、能力が反映されない社会は、あまり望ましい姿だとは思いません」

5 格差をどこまで認めるのか

- どの世界にも格差は存在する
 - 問題は、どこまで格差を容認するか
- 格差に対する二つの考え方
 - 上層と下層の差に注目する考え方
 - 上層と下層の差をどこまで縮めるべきか、あるいはその必要がないかを考える
 - 貧困者の存在は容認
 - 下層が全員貧困でなくなるためにどうすればよいか、という考え方
 - 上層と下層の差の存在を認めつつ、貧困者ゼロの世界を想定する
 - 橋木自身は後者の考え方を支持する
 - 貧困が増えることに大きな問題があるとみなすから

- 有能な人が報われること自体は必要 — しかしどこまで？
 - アメリカ:社長の報酬は一般社員の100倍を超す
 - 日本:大企業でも社長の報酬は一般社員の10倍前後
- 格差と企業の生産性 — 自動車メーカーを例に
 - トヨタは世界に冠たる効率性の高いメーカー
 - トヨタの社長の所得はアメリカの社長よりも相当低く、一般社員との格差も小さい
 - 所得格差は小さい方がいいかもしれない
- どこまで格差を認めるかは国民の判断に任される